

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

「自由人協会」とヘルバルト(4) :
1795年11月18日から1797年3月22日までの活動を
中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 精一, Sugiyama, Seiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/415

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「自由人協会」とヘルバルト(4)

～1795年11月18日から1797年3月22日までの活動を中心に～

杉 山 精 一

「私の哲学、いやむしろ私の哲学的探究はますますあるひとつの独自の道を歩んでいます。私にはフィヒテの自由論に対して、大きな疑いが生じてきています……とくに、シェリングに関する詳細な判断を試みようと思っています。」

(1796年7月20日、友人シュミットあてのヘルバルトの書簡)⁽¹⁾

1. はじめに ～「会議録」の意味～

本稿の目的は、1794年イエナ大学で結成された学生団体「自由人協会」の会議録に焦点をあて、ヘルバルト (J. Fr. Herbart, 1776-1841) の哲学研究の足跡を確認することにある。

ヘルバルトの入会が認められたのは1794年10月28日である。最後の参加記録は1797年3月22日であり、その3日後の3月25日、友人たちとともにイエナを離れ、スイスへと旅立っている。⁽²⁾

新たな生活をスイスに求めるまでのこの約二年五ヶ月の活動は、そのまま彼の学生時代と重なっている。ここでヘルバルトは、様々な経験をjする。

フィヒテの「知識学」の衝撃、「自由人協会」に集った友人たちとの刺激的な出会いと交流、深まった友情、母親とのあつれき⁽³⁾、シェリング哲学との出会いと研究。そのどれもが、この二年五ヶ月にわたる「協会」での活動と重なっている。

緊密な人間関係を土台に、精神的な自立に向かう経験の途上で抱えた知的課題を、ヘルバルトだけではなくメンバーたちは互いに共有していた。⁽⁴⁾

したがって、会議録に残されているヘルバルトの痕跡をたどる作業は、

「協会」で出会った友人との交流とその影響下で、青年ヘルバルトがどのような歩みを始めていたかを確認する重要な手がかりとなる。

ここに、ヘルバルトの哲学研究の源流がある。

今回とりあげる会議録は、1795年11月18日から1797年3月22日までである。これは、「自由人協会」（以下「協会」と略記）の最初の記録1794年6月18日から約一年半を経過し、ヘルバルトが「協会」で本格的な知的活動を展開する期間である。

2. 「協会」を支える中心人物

創設のメンバーであったシュミット、ベルガーたちが会を離れた後、「協会」の中心となったのがヘルバルトである。

1796年1月27日、ヘルバルトとともに「協会」を支えていく人物となるグリース（Johann Dietrich Gries, 1775-1842）が入会し、ヘルバルトは交流を深めていく。彼はシュミットあての書簡で、リストとともにグリースを高く評価している。

「三人の新しいメンバーが新たに入会しました。ティール、リスト、グリースです。リストとグリースはすばらしい頭脳と人格を持つ人物です。今では、私の最も親しい交際仲間となっています。」⁽⁵⁾

グリースはヘルバルトがイエナを離れた後、「協会」を支える中心人物となり、その後も書簡のやりとりを続けている。1799年6月2日の書簡では、自らの哲学的確信とともに、フィヒテの無神論論争を伝えている。⁽⁶⁾

創設期のメンバーが去り、新たなメンバーと交流を始めたこの時期、ヘルバルトが「協会」を支える中心人物であった根拠を二つ提示することができる。ひとつは、退会したメンバーとの交流を続けながら「協会」の活動を活性化させようとしていたことである。

1796年1月6日の会議録によれば、彼は会を離れたホルン（Friedrich Horn, 1772-1844）の書簡を紹介し、旧メンバーとの交流の仲介役を引き受

けている。続いて1月28日には、イエナを離れたメンバーに書簡を通じて参加を要請する文章をまとめている。ヘルバルトは旧メンバー、とくにシュミットを中心とする創設期のメンバーと頻繁に連絡をとり、「協会」の運営について意見交換していた。⁽⁷⁾

二つ目は、ヘルバルトが離れた後の「協会」で、彼の論文が何度も朗読されていることである。最後に参加した1797年3月22日の会議で、ヘルバルトは論文「自由人協会の遺産について」を朗読し、全メンバーに承認されている。

この論文は、1797年6月1日に最初に朗読され、ヘルバルトがイエナを離れた後も、繰り返し朗読されている。⁽⁸⁾ 今では現存しないこの論文は、「協会」の活動を方向づける指針として受け継がれていった。

3. 哲学研究の時期

この時期、「協会」には大きな人的移動があった。

まず入会者の多さである。会議録を確認すると、この期間だけでも新たなメンバーが12名参加している。大幅な新メンバーの加入は、「協会」の活動精神が変容する転機となっている。

会議録には、その痕跡を読みとることができる。

1796年2月11日にリストが提案した議論、「他者の陶冶に影響を与えることが「協会」の義務なのか、そうではないのか」は、この変容の明確な痕跡である。同年2月23日には、この問題が「協会」の目的にそぐわないことが提案されている。

創設期のメンバー、特にベルガー（Johann Erich von Berger, 1772-1833）は「協会」の理念を実現させる二つの課題、すなわち自身の教養や道徳性を向上させ、それを社会に普及させていくことを「協会」の理念として主張していた。先に指摘した議論は、創設期のメンバーの意図がもはや失われ、個人のアカデミックな探究に「協会」の活動が完全に移行していたこと

を示している。

またこの時期、深刻な問題は「協会」を離れるメンバーが多かったことである。1796年秋頃から翌年にかけての会議録には、「参加するメンバーが少なくなった」ことがとり上げられ、「協会」の存続はおそらく危機的な状況を迎えていた。ヘルバルトが託した論文「自由人協会の遺産について」も、「協会」の活動が衰退していたことを暗示している。

会議録を概観すると、本稿でとり上げたこの約一年間（1795年11月18日から1797年3月22日まで）は、ヘルバルトが中心的な役割を担った時期であると同時に、「協会」にとっての激動期であったことがわかる。

その過程で彼が交流を深め、会議録でとり上げたある人物にたどりつく。

4. 哲学研究の足跡

その人物は、ヒュルゼン（August Ludwig Hülsen, 1765-1810）である。時系列にそって、この時期ヒュルゼンが登場する会議録を整理してみよう。

- ① 5月9日 ヒュルゼンの友人への書簡が朗読された。
- ② 7月20日 ヘルバルトが、ヒュルゼンの論文と書簡を紹介する。この書簡で、ヒュルゼンは論文の評価を「協会」に求めている。
- ③ 8月3日 ヘルバルトが、ヒュルゼンの論文の評価を試みている。
- ④ 秋から初冬 ヘルバルトが、ヒュルゼンに関する論文を提出している。

会議録全体を見ても、これほど集中的にとり上げられた人物は見あたらない。登場する回数だけでもシラー（J. Ch. Fr. v. Schiller, 1759-1805）と並んで最も多い。⁹⁾ これはヒュルゼンの存在が、この頃から「協会」のメンバーにとって、特別な存在として認知されていたことをうかがわせる。しかも、ヘルバルトはヒュルゼンを1796年の7月から集中的に三回もとり上げている。

書簡にも、この会議録を裏づける足跡を確認することができる。

1796年6月27日、「協会」の実質的な創設者であるシュミットに、ヘルバルトはヒュルゼンとの交流について、次のように述べている。

「(ヒュルゼンは)ベルガーにふさわしい、高潔ですぐれた人物です。

ワイマールへの旅行で私たちは出会いました。ベルガー、ヒュルゼン、リスト、グリース、そして私です。私たちは…互いに親交を深めあい…哲学し、討論し、決して飽きて疲れることはありませんでした。」⁽¹⁰⁾

その約一ヶ月後に、ヘルバルトは「協会」でヒュルゼンの論文をとり上げている。7月30日のシュミットあての書簡には、ヒュルゼンの論文がシェリングの影響を背景にしており、シェリングに関する詳細な研究を試みることを宣言している。さらに9月リストあての書簡でも、次のように述べている。

「シェリングに関するささやかな小論によって、私はあなたの注意力をシェリングに向けようと思っています。……今私は、シェリングとヒュルゼンにとり組んでいます。ヒュルゼンの研究は、シェリングの研究によって完全に理解することができます。」(傍点筆者)⁽¹¹⁾

リストは、この書簡が送られる半年前の3月21日に「協会」を離れており、ヘルバルトは交流を深めたリストに、自らの哲学研究の状況を報告したのである。このとき、ヘルバルトが送った「小論」とは、「スピノザとシェリング」である。⁽¹²⁾ さらに1796年12月初め、シュミットにあてた書簡でヘルバルトは次のように述べている。

「親愛なるシュミット、私はやっとあなたに約束していた論文を送ることができます。……なぜ私がこれほど多くの時間をシェリングに費やしたのか。そのきっかけは、シェリングの精神をきわめて完全に理解したヒュルゼンの論文でした。」(傍点筆者)⁽¹³⁾

ヘルバルトがシュミットに送った論文とは、以下の二つである。

1. 「シェリングの論文に関する評価の試み：哲学一般の形式の可能性について：」⁽¹⁴⁾
2. 「シェリングの論文：哲学の原理としての自我について、あるいは

人間知における無制約者について」⁽¹⁵⁾

さきに紹介した「スピノザとシェリング」を含め、この三つの論文がヘルバルトの本格的な哲学研究の始まりと考えてよい。ヒュルゼンに集中的にとり組む前の1795年12月2日、会議録にシェリングの名前が登場しているのを見ると、この時期すでにヘルバルトにはシェリングの哲学が視野に入っている。ヘルバルトは、ヒュルゼンとの交流と彼の論文に刺激を受け、シェリングの哲学に向かったのである。

5. おわりに

本稿では「協会」の会議録を手がかりに、ヘルバルトの足跡をたどってきた。まとめると以下ようになる。

- ①1795年11月18日から1797年3月22日まで、ヘルバルトが「協会」の中心的な役割を担っていること。
- ②この期間での活動が、彼の本格的な哲学研究と重なること。
- ③その哲学研究を、シェリング研究から始めていること。
- ④シェリング研究のきっかけが、ヒュルゼンとの交流と彼の論文にあったこと。

ヒュルゼンこそ、ヘルバルトの哲学研究の源流にいる人物である。もちろんそこには、ヒュルゼンにつながるシェリングがいる。この後、ヘルバルトは、新たな地スイスで家庭教師としての生活を送りながら、自己の哲学的探究をさらに深めていくのである。

<資料：1795年11月18日から1797年3月20日までの会議録>⁽¹⁶⁾

年月日	会 議 の 記 録
1795年 11月18日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベーレンドルフは論文「人物描写と自然描写の類似について」を朗読した。 2. リストとティールが新メンバーとして提案された。 3. 提出論文の順番が決められ、ヘルバルトは三番目となった。
11月25日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは論文「フィヒテの自然法の原理について」を朗読した。 2. ベーレンドルフは「自然の喜び」という詩を朗読した。 3. リストの審査論文が朗読され、全会一致で入会が認められた。 4. ライマーズはヘルダーの詩「テルプシコレ」⁽¹⁷⁾の一部を朗読した。
12月2日	<ol style="list-style-type: none"> 1. フローレートは論文「時代の精神について」を朗読した。 2. リストが初めて協会に参加した。 3. ヘルバルトは、ニートハンマーの哲学雑誌からシェリングの書簡を朗読した。⁽¹⁸⁾
12月9日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは論文「哲学の思慮について」を朗読した。⁽¹⁹⁾ 2. リンドナーが協会に参加した。
12月23日	<p>グリースの入会について投票が行われ、審査論文を提出する事になった。</p>
1796年 1月6日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ライマーズは論文「人間と作家の逆説性について」を朗読した。 2. ヘルバルトはホルンの書簡を朗読した。この書簡で提案されていたのは以下のような内容である。 (提案) かつてのメンバーたちがイエナを離れたために、文通によって協会の議論に参加できることを勧める。 ホルンのこの提案については、次の会議で議論することになった。 3. ベッケドルフについて投票が行われ、審査論文を提出することが許可された。 4. 雑誌「ホーレン」から、若干の詩が朗読された。
1月13日	<ol style="list-style-type: none"> 1. カウフマンは論文「教皇の立場について」を朗読した。 2. ティールの審査論文が朗読され、全会一致で入会が認められた。 3. ホルンの提案について、次のようなことが決定された。 ○イエナを離れたメンバーには、協会の活動からは自由な立場で発言してもらうこと。 4. レーマーについて投票が行われ、審査論文が受理された。ヘルバルトが朗読した。

1月20日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ライマーズは論文「芸術家は人間性の最善について何ができるのか」を朗読した。 2. 協会は、イエナを離れたメンバーたちに対して、文通を要請する起草文を書くことをヘルバルトに依頼した。 3. フローレートは若干の詩を朗読した。
1月27日	<ol style="list-style-type: none"> 1. リストは論文「調和的な陶冶について」を朗読した。 2. グリースの審査論文が朗読され、全会一致で入会が認められた。 3. ライマーズが『若きウェルテルの悩み』から、オシアンを朗読した。
1月28日 (臨時会議)	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは、イエナを離れたメンバーたちに書簡によって参加を要請する起草文を朗読した。これについては、全会一致で同意された。 2. 協会の活動精神を報告するために、半年ごとに論文を旧メンバーに送付することになった。
2月3日	<ol style="list-style-type: none"> 1. シュビーゲルは論文「黄金の時代」を朗読した。 2. カウフマンは「メシア」の一部を朗読した。 3. 会の記録1795年11月18日から、1796年1月28日までが読み上げられた。 4. グリースが初めて会に参加した。
2月11日	<ol style="list-style-type: none"> 1. リストが「他者への影響について」議論を試みた。すなわち他者の陶冶に影響を与えることが、会の義務なのかどうか議論された。 2. レーマーの審査論文が朗読され、全会一致で受理された。 3. フローレートは(ヤコービの)『アルヴィルの書簡集』から、二つの書簡を朗読した。
2月17日	<ol style="list-style-type: none"> 1. シュビーゲルは「決闘について」の議論を提案した。 2. レーマーが初めて会に参加した。 3. グリースはヴィーラントの一部とルソーを朗読した。
2月23日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ティールは論文「古典語における従来の教授法について」を朗読した。(註) 2. ベーレンドルフは論文「天才の仕事における衝動について」を朗読した。 3. ライマーズは2月11日に提出された課題「他者の陶冶に影響を与えるのが会の義務なのか、そうではないのか？」に対する論文を朗読した。ライマーズは、この問題は政治的・道徳的にも会の目的にそぐわないものであり、メンバー内での友情に還元されるものであると提案した。 4. 1月28日付けの会の書状に対するホルンの回答が朗読された。ホルンは論文を送るのではなく、会議録の要約を送るように提案した。

3月3日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベーレンドルフは、「理念について」を議論のテーマにとり上げた。 2. シュピーゲルは、1795年8月20日の協会あてのベルガーの書簡と1795年9月17日のシュミットの返事を朗読した。 3. ケッペンとクリューガーは、文通という形で会に参加したいことを知らせてきた。 4. グリースは「自然のスケッチ」の一部を朗読した。
3月14日	<ol style="list-style-type: none"> 1. グリースは論文「時代の天才について」を朗読した。 2. ライマーズは、会を離れた友人たちを回想するパーティーを開くことを提案した。彼らを思い起こすことによって、同時に彼らが残した論文を思い起こすのである。会はこの提案に同意した。3月21日にこのパーティーを行う。 3. 2月3日から3月3日までの記録が朗読された。
3月18日	<ol style="list-style-type: none"> 1. グリースは「友情について」をとり上げ議論した。 2. ヘルバルトは口頭で「シノベに関するヴィーラントのディオゲネスの一部」を講義した。⁽²⁰⁾ 3. 「シノベに関するディオゲネスの一部」が、会で朗読された。
3月21日 (臨時会議)	<p><会を離れたメンバーたちを回想するパーティー></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは、会に別れを告げるリストの名前を読み上げ、リストは会に別れを告げた。 2. ライマーズはクラマーとケッペン、ベルンホフとシュミットをとりあげ、彼らについて回想した。友情にあふれたメンバーたちは、深夜2時までずっと一緒にいた。
5月5日	<p>ヘルバルトは、ベルガーの論文「教育について」「時代の天才について」を朗読し、論評した。</p>
5月9日	<ol style="list-style-type: none"> 1. カウフマンは論文「寛容について」を朗読した。 2. クリューガーは、旅の途中で会を訪問し、別れを述べた。 3. シュピーゲルは、会に別れを述べた。 4. ヒュルゼンの友人への書簡が朗読された。
5月28日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ライマーズは論文「ゲーテのタウリスのイピゲネイア」を朗読した。 2. メイヤーの審査論文が朗読され、全会一致で入会が認められた。 3. 旧メンバーのケッペンが、ゲッチェンゲンから会に送ってきた論文「哲学的な体系について」が朗読され、さらに吟味するために回覧することになった。 4. ベーレンドルフは、会で保存しているメンバーたちの論文が貸し出され返却されていないものもあり、回収してきちんと保存することを提案した。 5. マイナートが会のメンバーとして提案され、論文を提出することが許可された。 6. 会を離れたメンバーたちから、研究論文が送られてきており、今後会に対応していくことを決定した。

6月2日	<ol style="list-style-type: none"> 1. レーマーは、次のような問いを会に投げかけた。「生きる希望すら持てないような苦しい病気をしたとき、医師は死を与えることが許されるか」 2. ティールは、シラーの詩「孔子の格言」に関して考察を試みた。⁽²¹⁾ 3. 会を離れたメンバーであるリストの論文「道徳的、美的理念について」が朗読された。 4. メイヤーが会を初めて訪問した。
6月9日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベーレンドルフは、論文「タンタロスあるいは時代の哲学者たち」を朗読した。 2. マイナートの審査論文「自然の詩化」が朗読され、全会一致で入会が認められた。 3. ベーレンドルフは、次の会議でベッケドルフについて投票することを提案した。 4. 会議録の3月14日から6月2日までが読み上げられた。
6月16日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ティールは論文「風習への騎士社会の影響について」を朗読した。 2. ベーレンドルフは対話「アミュントールとアガトーン」をとり上げた。その内容は思弁的な真理と人間的真理との闘いについてである。 3. マイナートは初めて会を訪問した。 4. スイス出身のシュテックとフィッシャー、ハノーファー出身のベッケドルフについては、次の会議で投票を行うことになった。
6月21日	<ol style="list-style-type: none"> 1. フローレートは論文「ゲーテのタッソーについて」をとり上げた。 2. シュテックの審査論文「ストア主義の文化への影響について」とフィッシャーの審査論文が朗読され、入会が認められた。ベッケドルフは入会が認められなかった。
7月5日	<ol style="list-style-type: none"> 1. グリースは、リストが送ってきた論文「道徳的かつ美的理念についての試み」の感想を述べた。 2. 新メンバーのシュテックとフィッシャーを迎えた。 3. ヘルバルトは「散歩中の感情」を朗読した。
7月13日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは、リストの理念を擁護した。
7月20日	<ol style="list-style-type: none"> 1. カウフマンは論文「世界哲学者の概念について」を朗読した。 2. ティールは「イエナの教会の状況について」をとり上げた。 3. ヘルバルトは、ベルリン科学アカデミーによって提示された懸賞問題「ライプニッツとヴォルフ以来、哲学は何を成し遂げたのか？」を提示し、あわせてヒュルゼンの書簡を紹介した。その書簡では、ヒュルゼンが会のメンバーをよく知っているので、この問題について判断を依頼したいことが紹介された。

7月26日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベーレンドルフは論文「知識から行為への時代の移行について」を紹介した。 2. ベルンホフの論文「宗教改革者の性格について」が朗読された。 3. グリースは翻訳「アベラルへの教皇のヘロイーゼ」を朗読した。 4. シュビーゲルの書簡が朗読された。
8月3日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ヘルバルトは、ヒュルゼンの論文を評価した。 2. シュテックは自己認識について論じた。
9月10日	カウフマンは「道徳の美について」論じた。
9月24日	<ol style="list-style-type: none"> 1. ベーレンドルフは「無思慮について」論じた。 2. フローレート、ライマーズ、レーマーが、会に別れを告げた。 3. ヘルバルトは、ホルシュタイン出身のエッセンを会に推薦した。 4. メイヤーはこの日イエナを離れた。 5. フローレートも別れを告げたが、今後も参加することを約束した。 6. ライマーズは、シラーの「神の国ギリシア」を朗読した。 7. ベーレンドルフは「生の夢」をとり上げた。
1796年から 1797年冬の 会議の概略	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『賢者ナータンの思想』が朗読され、会の方針が議論された。 2. 会のメンバーが少なくなったために、メンバー個人の内面的な生活を大切にしていくこと、自由に会への要求を申し出ることが決められた。これはベーレンドルフによって提案され、フィッシャーに支持されて会に受け入れられた。 3. ムアベックが入会を認められた。審査論文は「自由について、およびそのための教育施設の概略について」である。 4. ヘルバルトは、論文「ヒュルゼンの論文について」「歴史家の無罪について」を提出した。 5. グリースはムアベックを快く受け入れ、亡くなった友人シュビーゲルの思い出を語り合った。ベーレンドルフも参加した。 6. シュテックが会を離れた。 7. ホルシュタイン出身のエッセンが入会し、ヘルバルトが歓迎の言葉を述べた。 8. ティールが退会した。
1797年 3月20日	<ol style="list-style-type: none"> 1. 多くのメンバーが晩に集まるのが困難であったので、午後4時に集まった。正規のメンバー以外の他の友人も数名出席した。 2. フィッシャーは論文「自然の魅力とその感受性について」を朗読した。 3. ベーレンドルフが友人シルデナーの論文を朗読した。 4. 議論の結果、シルデナーは入会を認められた。

3月22日	<ol style="list-style-type: none"> 1. 会は午後6時に集合した。 2. ヘルバルトは「自由人協会の遺産について」を朗読した。それは、将来の会のあり方についての誠実なプランを含んでおり、全メンバーが同意した。 3. グリースは、会を離れるメンバーたちに別れを告げ、エッセンと連携しながら会を維持していくことを述べた。 4. ベルン出身のマイの論文「世界市民と愛国心」の朗読で会が締めくくられた。マイの入会が認められた。 5. 会を離れるメンバーは次の通りである。 <ol style="list-style-type: none"> ①ヘルバルト ②ペーレンドルフ ③シュテック ④フィッシャー ⑤カウフマン ⑥ムアベック 6. 会にとどまるメンバー <ol style="list-style-type: none"> ①グリース ②エッセン
-------	---

<註>

- (1) J. Fr. Herbart's Sämtliche Werke, hrsg. von K. Kehrbach, O. Flügel u. Th. Fritsch, 19Bde., Langensalza 1887/1912, 2 Neudruck Aalen 1989, K.16-S.31.
本論文中、引用及び参照したヘルバルトの論文は、すべて上記の全集による。またその末尾に全集の略号 (K), 巻数, 頁数を示す。
- (2) K.16-55.
- (3) 拙著『初期ヘルバルトの思想形成に関する研究』風間書房, 2001年, 27-28頁参照。
- (4) 「協会」で交流のあった友人たちについては、以下の文献で触れている。
拙稿「フィヒテ・クラブとヘルバルト(1) —1790年代後半のイエナの若者たち—」神戸市外国語大学研究会『神戸外大論叢 第56巻 第4号』2005年9月, 63-77頁。
- (5) K.16-S.15.
- (6) K.16-S.106-112.
- (7) ヘルバルトは、シュミットあての書簡でこのホルンの書簡について報告している。旧メンバーとの交流は、ヘルバルトとシュミットが計画したことをこの書簡から読みとれる。K.16-S.15.
- (8) Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch der Gesellschaft der freien Männer in Jena 1794-1799, in: Festgabe für Eduard Berend zum 75. Geburtstag am 5. Weimar 1959, S.369-372.
- (9) Vgl. Raabe, P., S.336-383.
- (10) K.16-S.26.
- (11) K.16-S.36-37.

- (12) K.1-S.9-11.
 (13) K.16-S.42.
 (14) K1-S.12-16.
 (15) K1-S.17-33.
 (16) この資料は、Paul Raabe に依拠している。Raabe, P., S.336-383.
 (17) 「テルプシコレ」とは、ギリシア神話で歌と踊りをつかさどる女神である。

この詩は、1795年に第一部と第二部が出版されている。

Vgl. Herder's Werke, nach den besten Quellen revidirte Ausgabe, Dritter Teil (Terpsichore, hrsg. von Heinrich Düntzer, Berlin, 1871-79.

登張正美『世界の名著 続7 ヘルダー ゲーテ』中央公論社 1975年, 533頁。

ヘルダーが協会に与えた影響は、協会にとって特別な意味を持っている。協会が作成した「会則 (Constitution, 1795)」の冒頭には、彼の『人間性促進のための書簡』に登場する詩 (真理) が引用されている。メンバーにとって、ヘルダーは協会が目指す精神そのものであった。「会則」の冒頭で掲載されている詩は、次のような言葉で終わっている。

「友のために生き 祖国のために生きよう
 つらい死よりも 邪悪な行為を恐れるのだ
 おお真理よ！これこそが名誉なのだ
 これこそが使命であり 内なる報酬である」

Vgl. Constitution der Literarischen Gesellschaft zu Jena 1795, in: Marwinski, F.!, Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn...“, S. 111.

- (18) ニートハンマーが編集する哲学雑誌に掲載された「シェリングの書簡」とは、ほぼ間違いなく『独断論と批判論についての哲学的書簡』である。

Vgl. Schelling, F.W.!: Philosophische Briefe über Dogmatisums und Kriticis-mus, 1795, in: Historisch-kritische Ausgabe. im Auftrag der Schelling-Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften hrsg. von H.M.Baumgartner, W.G.Jacobs, H.Krings, und H.Zeltner, Reihe I. Werke3.

そこでどのような報告が行われたか記録は残されていないが、この時期ヘルバルトがすでに「自我」の問題をめぐる、シェリングを視野に入れていたことを確認できる。この後、ヘルバルトはヒュルゼンの影響とともに、シェリングへの批判を強めていく。その成果は、1796年9月に完成した小論「スピノザとシェリング」に最初に示されている。

Vgl. Spinoza und Schelling, eine Skizze, 1796, K.1-S. 9-11.

- (19) この論文は、現存していない。この時期すでにフィヒテの「絶対的自我」から離れ始めており、シェリングの「自我論」を視野に入れつつ研究の方向性を模索していたのではないかと推測される。
 (20) 「シノペ」とは、ディオゲネスの出身地である。

作者のヴィーラント（Christoph Martin Wieland, 1733-1813）が創刊した文芸誌「Der Neue Teutsche Merkur」には、1793年に「Die Gesellschaft der Freien Männer」という論文が掲載されており、創設前の協会に何らかの影響を与えていたと考えられる。

Vgl. K.Str.:Die Gesellschaft der freien Männer, in: Der Neue Teutsche Merkur, Weimar 1793, S.105-143.

ヘルダーとヴィーラントは、協会のメンバーたちにとって身近な存在であった。ヘルバルトの書簡にも、たびたびその動向が触れられている。Vgl.K.1-S.32.

(21) シラーは、「協会」で繰り返しとり上げられている。

ここで朗読された詩は「時間と空間」である。これは今日でもシラーの箴言として、なじみ深いものである。その一部を紹介しよう。

時間の歩みは三重です

ためらいがちに、未来はやってきます

矢のように、現在は飛び去り

永遠は静かに、過去は立ち止まっています

(シラー著、小栗孝則訳『シラー瞑想詩集』小石川書房 1949年、187-188頁所収。)